

## Persuasion のヒロイン Anne Elliot について

—心の交流—

野村 ヒサ

Jane Austen は生涯の間にまとまった小説を6篇書いたが、どのヒロインも終には例外なくふさわしい相手と結ばれることになる。洞察力に恵まれたこの女流作家は、若いヒロインたち(27才の Anne を除けば、あとは17才から21才)の思い込みや偏見から自己開眼に至る精神的成長を人間味豊に跡づけている。私は今回 Austen の最後の完成作品 *Persuasion* (1816年6月脱稿) について考察してみたい。この作品は、'a little bit of ivory, two inches wide, on which I work a brush so fine'<sup>(1)</sup>, という Austen 自身の言葉そのまゝに、完成の芸術を思わせる諸作品の中でも、とりわけ美しく静かでしかも自然なものとなっている。

この小説より前に書かれた5篇の小説との相違点については、多くの批評家たちが論じて来ているが、そのいくつかを挙げてみると、

- (1) Austen 自身が姪ファニーへの1817年3月23日付の手紙で Anne Elliot について 'You may perhaps like the Heroine, as she is almost too good for me'<sup>(2)</sup>, といっている。Austen のこれまでの小説のヒロインたちはすべて、長所と同様に欠点をも併せ持った人物たちであった。(物語そのものも、その欠点が原因となってさまざまな事件や起伏をひき起こして来た。) これに反して Anne Elliot は1つの完成された性格として登場する。
- (2) Virginia Woolf はその著書 *The Common Reader*<sup>(3)</sup> の中で *Persuasion* において Aus-

ten が何か人間的ならびに作家的変貌を示していることを指摘している。富田彬の訳を引用させていただくと、

'*Persuasion* には何か特別な美しさと特別な退屈さがある。退屈さというのは、よく2つの時期の間の過渡期を示すあの退屈さである。作者は面倒くさがついている。彼女は自分の世界の慣わしにあまり親しみ過ぎて、いまさら注意して眺める気が無くなっている。……彼女は題材のうえに全心を集中していない。ところがそういうことは以前の彼女の方が得手だったという感じを与える一方、他方ではまた彼女は今まで企てたことのない何かをしようと試みているのだという感じも与えるのである。彼女は自分で想像していたよりも世界がもっと大きく、もっと神秘的でもっとロマンチックなものだと気付きはじめている。

そう言われてみるとこの *Persuasion* には世界観の変化というほどではなくても、Woolf の論じた新生への念願といったようなものが現われているように思われる。

Woolf も引用している 'She had been forced into prudence in her youth, she learned romance as she grew older.'<sup>(4)</sup>(p30) という Austen 自身の言葉は、全体の作為の中で読むと、作者自身の分別への疑惑ほどではなくても、作者の自己告白につながる言葉であるようにも思える。

- (3) Douglas Bush は *Persuasion* を評して

'the deepest or highest plan of drama that Jane Austen ever reached' と言っている。<sup>(5)</sup>

- (4) Fay Weldon によれば、他の5篇の小説は声を出して読むことを前提として書かれたが *Persuasion* だけは声を出さずに読まれることを念頭において書かれた。<sup>(6)</sup>
- ... The sense of the books, the delicacy of the language, the phrasing, the dialogue — all was written to be absorbed by the ear, not by eye. This is one of the reasons, of course, why a Jane Austen novel can be so wonderfully read aloud, and pleurably listened to, on the radio. It is their true, their proper form, ... *Persuasion* was no doubt written with publication in mind — that is to be absorbed by the eye ...
- (5) Leroy W. Smith は *Persuasion* について個性的な評論を行なっている。<sup>(7)</sup>
- a) 他の5篇の小説とは異なり *Persuasion* は鎮魂曲じみだ文章で書き進められる。
  - b) Anne Elliot という孤独なヒロインのストイックな勇気と道徳性が、他のヒロインたちにはない威厳のようなものを彼女に帯びさせている。
  - c) 世間に対する保守的な態度が他の5つの小説より減少している。
  - d) Imagination が著しく減少して feeling の強さと正しさが強調されている。
  - e) おとなの恋とおとなの依存関係
- たしかに他の5篇の小説は、ヒロインたちが(結婚)相手と知り合ってから婚約するに至るまでの経緯を物語っているのに対し、*Persuasion* は8年前に結婚申込みを断ったヒロインが偶然その相手と再会し、さまざまな難関を乗り越えて婚約し直すまでの心の交流

がテーマである。

Jane Austen のヒロインたちは、その結婚することになる相手との関係が、始めから、かなりはっきりしている。この関係はそれぞれ作品によって異なった取扱いがなされているが、共通の要素は、一種の深い理解(密接な心の交流)である。またヒロインたちは自分の心の奥底の感情に忠実に生きようと努力するし、他人の筋の通った要求を認める能力もある。この高潔な雅量ともいべき属性が、冷静に自我を判断する能力と自他双方への誠実さと同居している。ヒロインたちは孤立することが多いが、その場合も、生命力がなくなったり鈍くなったりはしない。*Persuasion* のヒロイン Anne Elliot は相手の Wentworth 大佐がどう感じているかは解らなくても、以前にその結婚申込を断った時の自分の感情に疑いを持ったりは決してしない。Wentworth の自尊心のせいもあって、二人の連絡はひどく遅れ、苦しみは大きい、交際の復活は、長かった疎隔の間の相互の感情や苦悩を語り合うことで、いっそう豊かなものになる。二人は互いに尊敬しあうだけでなく、相手の心への感応が非常に良い。Austen の洞察力はこんな所にあるとも考えられる。

*Persuasion* という小説の存在理由はそのヒロインの想いと感情であるという意味のことを言った人がいる。<sup>(8)</sup>しかしこの小説の始めの方の、傾いた家運のため邸を他人に貸して、Bath へ引越そうという話の間は、Anne はまったく忘れられたような存在である。自我意識に蝕まれた父親の Sir Walter と姉の Elizabeth、愚痴っぽくヒステリーの妹 Mary などによって、Anne は誰かの便宜になる時の他はまったく無視されている。家族の者たちの空しくつまらない世界からの事実上の仲間はずれという点で、Anne は先ず読者の興味をひく。彼女は優雅な心とやさしい性質を持った目立たない女性である。しかしどうい

うわけか読者には、Anne の意識そのものが作品全体に脈搏しているのが感じられる。以前に婚約を断った Wentworth 大佐へのひそやかだが長く続いて来た愛情のために、Anne の意識は一触即発の状態である。Anne の愛情をしっかりと掴まえてしまった Wentworth のために、彼女の損失感はいっそう強くなっている。そしてこの教養はあるが引込み思案な Anne はまったくの偶然から Wentworth と再会することになる。たとえその時の状況と以前の感情の余韻が二人を引き離すように別々に作用していたとしても、二人の間には即座に再開出来る心の交流があるということが読者には解っている。

二人の以前の婚約について Austen は次のように述べている。

Half the sum of attraction, on one side, might have been enough, for he had nothing to do, and she had hardly any body to love<sup>(9)</sup>; (p 26)

似合いの恋人たちだったのだから、Anne は亡母の友人の Lady Russell に彼を諦めるように説得される。

Had she not imagined herself consulting his good, even more than her own, she could hardly have given him up. — The belief of being prudent, and self-denying principally for his advantage, was her chief consolation, under the misery of a parting — a final parting; and every consolation was required, for she had to encounter all the additional pain of opinions, on his side, totally convinced and unbending, and of his feeling himself ill-used by so forced a relinquishment.<sup>(10)</sup> (p 28)

二人が近付きになってそれから別れるようになったのは、ほんの2～3ヶ月の間の出来事だった。しかしそのために Anne の受けた苦しみは2～3ヶ月では終わらなかった。愛情

と追憶がそれから長い間青春のあらゆる喜びを曇らせ、娘盛りの花と生気の喪失はその後の生活にまで長い尾をひいて残った。それから7年余りの歳月が過ぎて、二人が偶然 Uppercross Cottage(妹 Mary の嫁入り先)で会った時、Anne はひどく狼狽し困惑する。

.... a thousand feelings rushed on Anne, of which this was the most consoling that it would soon be over. And it was soon over. In two minutes after Charles's preparation, the others appeared; they were in the drawing-room. Her eye half met Captain Wentworth's; a bow, a curtsy passed; she heard his voice — he talked to Mary, said all that was right; said something to the Miss Musgroves, enought to mark an easy footing: the room seemed full — full of persons and voices — but a few minutes ended it. Charles shewed himself at the window, all was ready, their visitor had bowed and was gone; <sup>(11)</sup>... (p 59)

このシーンは、たゞ Anne の眼を通して描かれているばかりでなく、その意味の重大さが Anne の神経繊維の一本一本を通して読者にひしひしと伝わって来る。

長い間離れていたために Anne と Wentworth は若い頃の親しさを特徴づけていた共通の空間やプライバシーを再び占めつづけることが出来なくなっている。また Anne は彼が喜んで二人の恋のやり直しをする意志があるかどうかについても、まったく自信がない。たとえ Anne の方で「執拗な愛着感にとっては8年という年月もまるで無いに等しいかもしれない。」(p 60)と感じていても、彼の感情をどうして読み取ればいいのか判らないのである。

Was this like wishing to avoid her? And the next moment she was hasting herself for the folly which asked the question.<sup>(12)</sup> (p 60)

Anne は判らないほど変わってしまったと Wentworth は思う。再会のあとで彼は「何年となく自分を痛めつけていたあの昔の感情」にひたる。

He had thought her wretchedly altered, and, in the first moment of appeal, had spoken as he felt. He had not forgiven Anne Elliot. She had used him ill; deserted and disappointed him; and worse, she had shewn a feebleness of character in doing so, which his own decided, confident temper could not endure. She had given him up to oblige others. It had been the effect of over-persuasion. It had been weakness and timidity.

He had been most warmly attached to her, and had never seen a woman since whom he thought her equal; but, except from some natural sensation of curiosity he had no desire of meeting her again. Her power with him was gone for ever.<sup>(13)</sup> (p 61)

以上の一節は3人称で書かれてはいるが、この上なく明白に Wentworth の感情を述べている。また彼の想いを認めてみても、読者には2人の間の距離が如何に大きくなってしまっているかを感じ取ることが出来る。Wentworth のきっぱりした態度の中に「今では Anne は僕にとって何でもないんだ。」と無理に納得する必要でもあるかのような、何か自己防衛のようなものの存在を感じさせるのだ。またどんな情勢の変化で2人はいっしょになれるのだろうかとか、2人は永遠に離れたまゝなのかしらとか気になりはじめたりする。Anne は彼に自分の気持ちを直接伝えたり、昔の行動を弁護したり出来る立場にはいない。もともと婚約を破棄したのは彼女の方からだったから。読者は Anne の 'the nice tone of her mind, the fastidiousness of her taste' (p 28) についてもよく知っ

ている。この連絡の困難さが Anne の孤独さをいっそう極立たせている。彼女は自分の深い感情を胸の奥に秘めておかなくてはならない。そのためごちない行動を取らないためだけでなく、自分自身をそれ以上傷つけないためにも、ある種の「自制」を実行しなければならぬ。読者は Anne のこの苦境に同情し、その苦境に対処しようとする冷静なやり方にもなおいっそう深い同情を覚える。2度目に Wentworth と顔を合わせたあと、Anne は自分を納得させようとしはじめる。意志の力でその努力をするのだが、当然と思われる確信も如何に空虚なものであるかが読者には解る。

"So altered that he should not have known her again!" These were words which could not but dwell with her. Yet she soon began to rejoice that she had heard them. They were of sobering tendency; they allayed agitation; they composed, and consequently must make her happier.<sup>(14)</sup> (p 61)

以上の1節は Anne が到達した「落ち着き」の度合いを、いくぶん誇張している。しかし繊細な識別力、豊かな知性のおかげで彼女はなんとか自制することが出来る。自分が昔の事を思い出すから Wentworth も昔の感情にもどってくれることを期待したりはしないが、Anne には彼が昔のまゝであり、少なくとも悪い方へは変わっていないことを確信することが出来る。この様な Wentworth への感応から読者は Anne の無欲さと感情の深さを伺い知ることになる。Juliet McMaster が指摘しているように

Anne has the particular pain of a special kind of intimacy; although they are, as she believes, perpetually estranged, she still knows the workings of his features well enough to be able to interpret his feelings better than anyone else. "There was a momen-

tary expression in Captain Wentworth's face at this speech, a certain glance of his bright eye, and curl of his handsome mouth, which convinced Anne, that instead of sharing in Mrs. Musgrove's kind wishes, as to her son, he had probably been at some pains to get rid of him; but it was too transient an indulgence of self-amusement to be detected by any who understood him less than herself" (67). This intentness of scrutiny and minuteness of observation are frequently noticeable in the novel, for in the intervals of Anne's watchfulness of Wentworth, Wentworth is often watching her — he is the only one to perceive, for instance, her fatigue after the walk to Winthrop, and so he can take action for her relief.<sup>(15)</sup>

ずっと以前に消え去ってしまった親しさの余韻は、Anneにとって特別の苦痛なのである。自分でそんなことはするまいと思っても、つい Wentworth に気を遣ってしまったたり、眼を放さずじたりしてしまう。Anne に対する Wentworth の最初の振舞いが、すべての希望を無惨に打ち砕いてしまったことがわかっていても、読者の方が Anne 自身よりも、可能性を認める気になってしまっている。例えば Wentworth がピアノの傍に腰掛けているところへ Anne がうっかり近付いて行く場面で 'cold politeness, his ceremonious grace were worse than anything' (p 72) という個所では Anne のつらさに同情を禁じ得ない。また、うるさくまつわりつく甥の Walter を Wentworth が Anne の背中から引き離してくれたあとで、彼が隣室で子供とふざけてさわいでいる声を聞いて、Anne は彼がお礼を言われるのをわざと避けて、彼女と話すのを極端に嫌っていることを知らせようとしているのだと解釈する。しかし(読者にも解るように)、Wentworth は無意識に Anne にひきつ

けられているのである。偶然 Anne と 2 人だけになった時の、彼のどぎまきする様子は、まだ Anne に関心を持っている証拠であると考えられる。Anne は一時的にないがしろにされた Charles Haiter に同情したり、婚約者に死なれて悲嘆にくれている Benwick 大佐より自分の方が感じ方に老いがあると感じることから、読者は Anne が自分の深い愛着感を Wentworth よりははっきり自覚していることを推量出来る。(周囲の状況があまりにも不利なこともあって) Anne は自分ではあえて認めようとはしないが Wentworth が Musgrove 姉妹のどちらとも恋仲ではないことは解っている。一方 Wentworth は昔 Anne に感じて拒絶された恋心を Louisa Musgrove に実らせたい気になって来る。11月のある晴れた日、Uppercross を皆で三三五五と連れ立って散歩しながら、Anne は傾いていく幸福を深まって行く秋になぞらえて表現し、ともに消え失せた青春と希望と春との譬喩に満ちた何かやさしい14行詩を思い出す (p 85)。しかし Anne は心の奥に(ほとんど無意識ながら)恋の復活を予感している。Anne の行動には何の目的意識もないが、その物分かりの良さや寛大さを示していると思われる。(無理のない意味で)冷静で自己を甘やかすこともなく、縁の下の力持ちで満足している Anne は、他の人々の要求に敏感であり、でしゃばらない方法で人々に対応しているうちに、その価値を認められることもある。

Uppercross で散歩している時、Anne は自分が Louisa と Wentworth の間の話題になっているのを偶然立ち聞きする。その時の Wentworth の話しぶりは、Anne をひどく動揺させずにはおかないほど、彼女への関心を示していた。またこの事より少し前に Wentworth は「あまりにも妥協的な性格 (Anne を示唆している) の一番困る事は、外からどんな影響を受けてもそれがぜんぜん当てにな

らないということです。」と言っている。また胡桃の實の頑丈さを例にして Wentworth は堅固な決断力のある性格の確認をするのだが、それは彼の Anne への失恋で傷ついた感情の苦さを示していると同時に、Anne の性格の強さを彼が上つ面だけしか見ていないことも示している。

あとになって Wentworth の胸を打つのは、女の愛の持久性についての Anne の告白である。そして Anne 自身が『持って生まれた強い力で、秋のあらゆる嵐に耐えて生き残っている』（これは Wentworth が Louisa に言った言葉）ことになる。Lyme で Anne の顔色が浜辺の散歩によって生彩を取り戻している、すれ違った紳士（あとで Sir Walter Elliot の後続者の William Elliot であったことが判る。）にほればれと眺められた時、Wentworth はちらっと Anne を見る。その光った眼が「あの男はあなたの美しさに打たれたが、今は僕でさえ Anne らしい女ひとをもう一度見るような気がしているんです。」と言っているようだった。しかし Lyme の Lower Cobb（下の突堤）では Louisa の墜落という人さわがせな事故が起こって、それが Anne Elliot の真価を Wentworth に痛切に感じさせることになる。事故に続く混乱の中で Anne だけが冷静さを失わないでいる。Wentworth が Anne の真価を認めるのは、ずっと後になってからであるが、そのことについて話が出来るようになった時、Wentworth は Lyme で起こったことの結果として彼ははじめて操守と片意地との区別や、むこう見ずの冒険と沈着な心の決断との差異を知ったのだと話す。

... There he had learnt to distinguish between the steadiness of principle and the obstinacy of self-will, between the darings of heedlessness and the resolution of a collected mind. There he had seen every thing to ex-

alt in his estimation the woman he had lost, and there begun to deplore the pride, the folly, the madness of resentment, which had kept him from trying to regain her when thrown in his way.<sup>(16)</sup> (p 242)

Louisa の墜落事故に続く大混乱の描写を読んでいく間に、読者は Anne の冷静さが Wentworth にとって如何に大切かということを感じ取る。

そのうえ、それが彼女自身の気質のうちで如何に絶対不可欠な部分を占めているかということもおぼろげながら解ってくる。

Anne, attending with all the the strength and zeal, and thought, which instinct supplied, to Henrietta, still tried, at intervals, to suggest comfort to the others, tried to quiet Mary, to animate Charles, to assuage the feelings of Captain Wentworth.<sup>(17)</sup> (p 111)

事故の後始末が一段落した時、Wentworth は Anne が Louisa と共に Harville 家に残ることを提案する。

"You will stay, I am sure; you will stay and nurse her;" cried he, turning to her and speaking with a glow, and yet a gentleness, which seemed almost restoring the past. — She coloured deeply; and he recollected himself, and moved away.<sup>(18)</sup> (p 114)

'a gentleness, ...' の描写は読者にはっきりと Wentworth の恋が戻って来たことを示している。ところが昔の愛情を復活させて、Anne に近付くことはそれまで以上に難かしくなる。Louisa の負傷は彼がそれとなくそそのかした結果であるとも取れる。Wentworth が Anne の代りに妹の Mary が残ることになったことを知った時の反応を見て、Anne は「私はただ Louisa の役に立つことだけが取り柄だと Wentworth に思われているのだ。」と僻まずにはいられない。

... she would have attended on Louisa

with a zeal above the common claims of regard, for *his* sake; and she hoped he would not long be so unjust as to suppose she would shrink unnecessarily from the office of a friend.<sup>(19)</sup> (p 116)

Uppercross へ馬車で帰る途中、Henrietta があの運の悪い突堤行きのことを悲しんでいると Wentworth は自分がなすべき事をきちんとしておかなかったからだとして残念がる。Anne は内心で「この人 (Wentworth) は性格の強い人は幸せで得だと以前に言ったことがあったが、それを今疑ってみる気はないのかしら。」と思う。また娘の事故について Musgrove 夫妻に事情を説明するのに一番良い方法について、Wentworth が Anne の判断を尊重してくれたことは嬉しい思い出となった。

以上のようなわけで、いくぶん感情を共にするようになり始めても、いろいろな情況に妨げられて、第一巻の終になっても、Anne は自分が Wentworth に再会出来たことの影響について何も気が付かない。また Wentworth の方も Anne の力をまったく認識していない。それでも Anne は 2 人の間に交わされたほんの少しのことを高く評価する気になるのだった。

Scenes had passed in Uppercross, which made it precious. It stood the record of many sensations of pain, once severe, but now softenend; and of some instances of relenting feeling, some breathings of friendship and reconciliation, which could never be looked for again, and which could never cease to be dear.<sup>(20)</sup> (p 123)

そのうちに Anne は Lyme についての会話を Wentworth と上辺<sup>うわべ</sup>は平静に交わすことが出来るようになる。以前には Wentworth という名前だけでも自分の心から追い拂うことによって何とか対処しなければならない程、

Anne の感情は強烈だったのだが、その思い出を胸に秘めて生きて行かなくてはならないものと Anne は悟ったのだ。

She could not speak the name, and look straight forward to Lady Russell's eye, till she had adopted the expedient of telling her briefly what she thought of the attachment between him and Louisa. When this was told, his name distressed her no longer.<sup>(21)</sup> (p 124-5)

Croft 提督が Lyme での Anne の働きについて Wentworth が感謝していたということを知った時、Anne は彼を思い出するという楽しみが増しただけで、これが希望につながるということにはなかった。この時点で、Anne の感じることは、ただ思い出として存在しているに過ぎない。彼女は真の感情と組み合った思い出だけを大切にしているのだから。その思い出は想像による経験ではない。だから Mr. William Elliot がやがてこの物語に堂々と登場するのだが、彼が Wentworth の代りに、Anne の恋人になるということは決してあり得ない。Austen は重要な段階において Wentworth への Anne の愛情と同様に、彼女の自己意識も客観化しようとしている。

Prettier musings of high-wrought love and eternal constancy, could never have passed along the streets of Bath.<sup>(22)</sup> (p 192)

読者は Elliot 氏が Anne の愛情の中で Wentworth にとって代れる種類の人物ではないということを知りたいという気になって来る。このことはただ Anne について判っていることだけでなく、Elliot 氏の振舞からも簡単に見破ることが出来る。Lyme で散歩の途中、彼は Anne をほればほれと眺めるのだが、Austen 自身の挿入した 'completely a gentleman in manner' (p 104) という表現には、かすかだか苦心の跡が伺われる。Bath にお

いては Elliot 氏はひどく簡単に皆に認められて仲間入りする。Lady Russell による彼の美点についての要領のよい摘要には彼の口達者をほのめかした表現が含まれている。

Every thing united in him ; good understanding, correct opinions, knowledge of the world, and a warm heart.<sup>(23)</sup> (p 146)

Lady Russell の見解では、Elliot 氏は Anne にとって理想的な相手なのである。彼女は Anne が今年のうちには Kellynch の教会で Elliot 氏と結婚式を挙げるのを見たいという希望を抱く。(p 161) しかし Anne はそのような結婚は不幸の「長い冬」を招くと感じ、その話を Lady Russell から聞くと言下に反対する。Wentworth への愛情があるために Anne は Elliot 氏にぜんぜん魅力を感じないからでもある。しかしこの理由だけのために Anne は Lady Russell の示唆に反対したとは考えられない。女性の心理は複雑だとよく言うが、Lady Russell の言葉の示唆する内容に Anne が、ほんの瞬間だが、強い魅力を感じたことも事実である。

For a few moments her imagination and her heart were bewitched. The idea of becoming what her mother had been ; of having the precious name of "Lady Elliot" first revived in herself ; of being restored to Kellynch, calling it her name again, her home for ever, was a charm which she could not immediately resist.<sup>(24)</sup> (p 160)

しかし想いが Elliot 氏のことにと及ぶとすぐ Anne は我にかえり、Elliot 氏とは縁がないとはっきり思うのである。

... it was not only that her feelings were still adverse to any man save one ; her judgment, on a serious consideration of the possibilities of such a case, was against Mr. Elliot.<sup>(25)</sup> (p 169)

この一節の内容、つまり Wentworth が

Anne の生活の中へ再び登場して来るより前に、Anne が William Elliot を (まだ意識の中においてだけではあるが) 拒絶すると云うことは、読者が Anne について判断する上で一つの重要な基準となる。Austen はこゝで、そのヒロインの真の道德価値を立証していると考えられる。Anne は自分の本当に愛しいものを心の中に思い続けることが出来る (つまり守操) し、見せかけだけのものを (一見結構に見えても) 拒否することの出来る鋭敏な識別力を持ってもいる。その上、Anne に以前に与えられた Lady Russell の説得の影響 (これが Wentworth の誤解の素なのであるが) を考え合わせると、こゝで、Anne は Lady Russell の意見とは関係なく、自分の心の奥に判断力を持っているということがはっきりする。このことが大切である。

William Elliot と知り合ったばかりの頃、Anne の眼から見ると彼は全体的な慎重さと物腰の点で、Lady Russell と大へん似ているように思われた。それはただ単に社会的地位への彼のうわべだけの尊敬を見すかすということだけでなく、そういう敬意の根底にあるものを暴く、つまり Elliot 氏の仮面のすぐ下にある真の姿を突きとめるために、彼のうわべの洗練と見せかけの分別を見抜くという問題となって来る。

Lady Russell が Elliot 氏の表面的なものを支えている実体がなかなかしっくりしていることに気付いた時、他方では Anne が従兄 (Elliot 氏) と自分は常に同じ考え方をすることは限らないということに気付く。(p 148) Elliot 氏は Anne と親しくなろうと努力するのだが、Anne は、彼の性格には珍しくははっきりしないところがあり、そのため自分の性格とあまりよく合わないと感じる。家柄とかつき合いとかに対する彼の敬意は Anne から見ると、ただのお愛想だけでない「理由ある類似」であるように思われる。「良い知り合い」



についての Elliot 氏の定義は Anne のものとは全く異っている。Anne の云う「良い知り合い」とは才気があって博識な人のことなのであるが、Elliot 氏は「それは良い知り合いではなく、最上の知り合いですよ。」とからかう。なかなか説得力がある。Anne は Lady Russell に Elliot 氏のことを「とても感じのいい人」と言うが、その時 Anne は心の中で Elliot 氏の物腰《行儀は一点非の打ちどころもなく、垢ぬけしていて、ゆったりしていて、いや味がない (p 143)》を Wentworth の様子と比べていた。2 人の態度を比べれば、決して同じではないが、立派であることには変りがなさそうであった。その 2 人の差異を表わすのに、Anne はかなり注意深く言葉を選択している。

Anne が Elliot 氏をよく知るようになるにつれて、疑いが増していく。

Though they had now been acquainted a month, she could not be satisfied that she really knew his character. That he was a sensible man, an agreeable man — that he talked well, professed good opinions, seemed to judge properly and as a man of principle, — this was all clear enough. He certainly knew what was right, nor could she fix on any one article of moral duty evidently transgressed ; but yet she would have been afraid to answer for his conduct. She distrusted the past, if not the present. The names which occasionally dropt of former associates, the allusions to former practices and pursuits, suggested suspicious not favourable of what he had been. She saw that there had been bad habits ; that Sunday-travelling had been a common thing ; that there had been a period of his life (and probably not a short one) when he had been, at least, careless on all serious

matters ; and though he might now think very differently, who could answer for the true sentiment of a clever, cautious man, grown old enough to appreciate a fair character?<sup>(26)</sup>

(PP160~161)

Elliot 氏について考えてみると、彼にはあけっぴろげなところがなく、その点が Anne に彼の誠意を疑わせる結果になる。もちろん Anne の思った通りであることが読者にもだんだん明らかになる。そのうちに昔の学校友達の Mrs. Smith から、Anne は Elliot 氏の真の姿を知らされることになる。しかし Anne はその前から Elliot 氏が 'too generally agreeable' (八方美人すぎる) (p 161) ことに気付いている。Elliot 氏の御都合主義の世渡りを見ていると彼にはぜんぜん特徴がないということになる。誰とでも折り返いが良過ぎる Elliot 氏とは、Anne もそれ以上親しくなり様がない。そのうちに彼女にとって都合の良いことに、Benwick 大佐が Louisa と婚約したというニュースが伝わって来る。Anne にはあまりに意外で信じられない程である。

Anne's heart beat in spite of herself, and brought the colour into her cheeks, when she thought of Captain Wentworth unshackled and free. She had some feelings which she was ashamed to investigate. They were too much like joy, senseless joy.<sup>(27)</sup> (p 167)

Anne の喜悦の感情のこの描写は、もう少し後の Bath の街路上での 2 人の再会の場面と並んで非常に印象的なものである。

For a few minutes she saw nothing before her. It was all confusion. She was lost ; and when she had scolded back her senses, she found the others still waiting for the carriage,<sup>(28)</sup> ... (p 175)

また、短かい描写ではあるが、コンサートのシーンもやはり感動的である。Anne も Wentworth も感情が胸に迫って互にくつ

ろいだ話しが出来ない。Elliot 家の者たち（父と姉）が彼を認めようとしないことに Anne は苦痛を感じるが、それよりも彼の自分に対する本心を確かめなければならない。一方 Wentworth の方も William Elliot が成功したライバルでないのかどうか確かめる必要がある。Wentworth が到着した時、Anne の方から（勇気を出して）話しかける。はじめのうちは少しごちないが、それでも互いに努力してだんだんうちとけて行く。

and presently with renewed spirit, with a little smile, a little glow, he said,<sup>(29)</sup> ... (p 181)

Wentworth は早速重要な問題に触れる。筋の運びはかなり込み入っている。いっきに解決してもらいたいと読者は感じるが、話は Lyme に関するものへと発展していく。Wentworth が Lyme は Anne にとって苦しい思い出があるに違いないと言った時、Anne は何か思い出してほんのり顔を赤らめ、「Lyme についての私の印象は、全体としては、大へん感じが良いのです。」と答える。(p 184)

それから 2 人の会話は Dalrymle 伯爵夫人一行の到着によって中断されてしまう。Wentworth は Anne の赤面が William Elliot のせいだと思いつながらその場を去る。Anne は自分では気付かなかったが、コンサートの間の彼女の明るい表情は、Wentworth の言葉に対する意識が原因だった。

... all, all declared that he had a heart returning to her at least; that anger, resentment, avoidance, were no more; and that they were succeeded, not merely by friendship and regard, but by the tenderness of the past; yes, some share of the tenderness of the past. She could not contemplate the change as implying less. — He must love her.<sup>(30)</sup> (p 185-6)

今は Wentworth が自分を愛してくれているという確信を持つことが出来て、Anne は嬉しさがこみ上げてくる。もう 1 度 Wentworth に会おうとして Anne はいろいろ手を尽くすのだが、従兄 (William Elliot) に独占されたり、他の人々にとり囲まれたりして、Wentworth と遠くから眼を見交わすことも出来ない。そのうちに Wentworth は遠慮がちではあるが取り急いだ様子でいとまを告げる。

As her eyes fell on him, his seemed to be withdrawn from her. It had that appearance. It seemed as if she had been one moment too late.<sup>(31)</sup> (p 188)

大そう有望に思われた夜も挫折感を残して終ってしまう。Anne は Wentworth が William Elliot にやきもちを焼いていたのだと見当がつく。

How was the truth to reach him? How, in all the peculiar disadvantages of their respective situations, would he ever learn her real sentiment?<sup>(32)</sup> (p 191)

恋人たちは相変わらず。解決からは程遠い所にいるようである。その次に Anne が White Hart で Wentworth に会う時

... but she feared from his looks, that the same unfortunate persuasion which had hastened him away from the concert room, still governed. He did not seem to want to be near enough for conversation.<sup>(33)</sup> (p 221)

コンサートの晩、Wentworth が勘違いして、あたふたと演奏会場を立ち去った時のことをいまだに根に持っているのではないかと Anne は心配する。Wentworth は William Elliot についての Charles (Anne の義弟) の話を耳をそばだてて聞いていた。やはり気にしているのだ。Anne は義弟によって提供された機会をとらえて、翌晩に予定されていた Elliot 家の夜会に無関心な様子を示す。これ

が Wentworth を再び彼女のそばに引きもどす。長い間（8年間）離れていたことについての彼の言及は、さんざんじらされて来た読者に、「もうこれ以上2人を引き離しておくものはないんだ。」という確信を与える。それでも Anne は周囲の状況に妨げられて、幸福とみじめさの間のどこかで、引続き心配しているような状態におかれている。Henrietta（Anne の妹 Mary の義妹）が外出しようと言い出し、Anne は仕方なく出かける。そこへ Sir Walter（Anne の父）と長女 Elizabeth（Anne の姉）が到着して一同を翌晩の夜会に招待し、Wentworth も招待される。デリカシーのぜんぜん無い Mary が皆に聞こえるひそひそ声でささやく。

"Only think of Elizabeth's including every body!" whispered Mary very audibly. "I do not wonder Captain Wentworth is delighted! You see he cannot put the card out of his hand."<sup>(34)</sup> (p 227)

この言葉が Wentworth に聞えた時の「軽蔑」は、すぐさま Anne に感じ取られる。そして Anne は Wentworth が果たして夜会に出席してくれるかどうかという自分では全く解決のつかない問題に、翌晩の夜会が始まる時刻まで悩まされ続けることになる。

このように2人の間に存在して来た緊張は解決の瞬間（終から2章目）まで見事に維持され続ける。Austen の運びのうまさである。

当然のことながら、Anne と Wentworth がその瞬間瞬間に、それぞれ感じるこの間には差異がある。それでいて相互に反応しようとする2人の潜在的な意志は周囲の状況によって無惨に食い違っ挫折してしまう。終から二番目の章になっても、2人はいっしょになれたかと思うと、すぐまた別れ別れになったりする。愛情がもう少し弱いものだったら、2人のうちのどちらかが、もっと直接に宣言してしまうのではあるまいか。この期

に及んでも Austen はまだ2人の連絡は互いの感情を傷つけたり、互いの誠意を危うくしたりしないで、不安が解消されるような余地を残しておくくらい間接的であるべきだと考えているのであろうか。2人がそれぞれ同じひとつの部屋の中の別々の部分にしながら、互いに相手のことに気を配って耳をそばだてながら、別々のことをしている。Mrs. Croft（Wentworth の姉）が Mrs. Musgrove（Anne の妹 Mary の義母）に結婚出来るといっはっきりした見込みがないのに婚約することの「賢明さ」について疑問を投げかけた時、Anne はそれが自分の場合にちょうど当てはまるような気がして身体じゅうがぞくぞくするような興味を感じる。その時 Anne は、Wentworth がペンを止め、すばやく意識的な一瞥を投げるのを見る。

... her eyes instinctively glanced towards the distant table, Captain Wentworth's pen ceased to move, his head was raised, pausing, listening, and he turned round, the next instant to give a look — one quick, conscious look at her.<sup>(35)</sup> (p 231)

やがて Anne は Harville 大佐と話しはじめ、大佐は自分の死んだ妹と Benwick 大佐の話を持ち出す。Anne は愛の持続性について女性の観点から意見を述べる。

We certainly do not forget you, so soon as you forget us. It is, perhaps, our fate rather than our merit. We cannot help ourselves. We live at home, quiet, confined, and our feelings prey upon us. You are forced on exertion. You have always a profession, pursuits, business of some sort or other, to take you back into the world immediately, and continual occupation and change soon weaken impressions.<sup>(36)</sup> (p 232)

いつもの Anne に似合わず、かなり雄弁なのが印象的である。Harville 大佐は男の強い

身体は強い愛情を意味すると主張する。Anne は同様な分析を活用して、「男は女より頑丈ですが、女より短命です。」(p 233) と言う。女性の愛情が(男性より)長続きするという自分の見解をこうして支えたわけであろう。そして男性が耐えるべき困難の大きさを認めて Anne は

... It would be too hard indeed" (with a faltering voice) "if woman's feelings were to be added to all this."<sup>(37)</sup> (p 233)

と言う。その時 Wentworth がそれまでいた部屋のひっそりした片隅から「コトン」と小さな音が聞こえる。彼がそれまでの Anne の話の内容を聞いていたのだ。でも彼女は Wentworth には聞こえるはずがないとも思っていた。だから彼女はそれだけいっそう非利己的な意識をもって、女性の感情について論ずることが出来たわけである。

(Wentworth 以外の人にむかって一般論を論じていたわけなのだから。) とはいっても Anne の言葉には個人的な性質があることも否めない。その性質が音楽会の時に引き起こされた誤解を拂いのけてくれるのである。Anne が女性の愛情の持続性を要約する時、彼女自身が経験した挫折感と苦悩を確証する独得なひびきがかもっているように読者には感じられる。

.. All the privilege I claim for my own sex (it is not a very enviable one, you need not covet it) is that of loving longest, when existence or when hope is gone."<sup>(38)</sup> (p 235)

「私たち女性に是非認めていただきたい特権は、…愛する人がこの世にいなくなっても、希望がなくなっても、いつまでもいつまでも愛していけるということなんです。」

Wentworth は部屋を去る時に、Anne に走り書きの手紙を手渡す。(彼は見事な礼儀正さで2人に強いられた伝達の間接性を続行している。)

2人が町で出会って、割合に静かで辺りな砂利道の方へ入って行った時、やっと2人は愛の方針をゆっくり思案することが出来る。

(p 240)

全体としての筋の発展からみると、この時期の設定と描写は Austen 小説の中でも芸術性の高いものであると言えよう。過去の不安と緊張のあとで、ほっとした、生気にあふれた一時期である。2人の恋人たちは過去のことを楽しんで語り合い、昔のことを思い出して、この上なく痛烈な批評をすることも出来る。それがまた幸福と理解の深まりにつながっていく。

... they returned again into the past, more exquisitely happy, perhaps, in their re-union, that when it had been first projected; more tender, more tried, more fixed in a knowledge of each other's character, truth, and attachment; more equal to act, more justified in acting."<sup>(39)</sup> (p 240-1)

2人は再び昔に帰ったが(Lymeの時とは異なって)今度の再会には、えもいわれぬ嬉しさがあつた。彼らは前よりも思いやり深くなり、試練を経ていた。お互いに相手の性格や誠実さや愛情をすっかりのみ込んでいた。今では実行する資格が出来たし、実行しても差支えなくなっていた。」

この親交は、共通の秘密の時間とともに、その前の秋冬の季節が、早春の気配に道をゆずったという含みが感じられる。散歩している政治家たち、騒いでいる家政婦たち、ふざけている娘たち、子守りたちや子供たちのざわめきに取り囲まれて2人は散歩を楽しんでいるのである。

*Persuasion* は Austen の作品の中で、方向転換を示す作品であり、新しい出発の兆しさえ伺われると、多くの批評家たちに示唆されて来ている。Virginia Woolf の批評はその一例である。(すでに述べた)

またロマン主義詩人たちの影響もこの理由の一つとして論じられている。Uppercross での Anne の散歩の描写の中の '何の美しさも品位もない' という、ひどく非芸術的な表現が、秋を謳った芸術的な詩句の何行かと並んでいる。

... large enclosures, where the ploughs at work, and the fresh-made path spoke the farmer, counteracting the sweets of poetical despondence, and meaning to have spring again,<sup>(40)</sup> (p 85)

また、この大きな私有地を通して一行が登っていく 'gradual ascent' (p 85) 爪先上りの登り坂は後に 2 人の恋人たちが Bath でゆっくりと登っていく砂利道の 'gradual ascent' の先取りであると思われる。Uppercross での散歩の折に、生け垣の陰で Anne は Wentworth が妥協的すぎる性格について話すのを偶然立ち聞きしてひどく困惑するのだが、(互いが生け垣の両側にいて、互いの存在に気付かないという設定は、Austen 小説の重要人物たちの納得や開眼に大きな役割を果たしている。) Bath の砂利道の「爪先上りの上り坂」では 2 人は周りの人々の群には無頓着である。Austen はこうして 2 人の復活した親交を巧みに際立たせている。

Walton Litz は

'in sharp contrast with Jane Austen's other novels, we are left with no stable place or home in which we can imagine Anne's future happiness'<sup>(41)</sup>

と書いているが、これは前に論じた Leroy W. Smith の評論の (C) と相通するものがある。また他の 5 篇の小説よりも Austen は柔軟性のある考え方をするようになっていることも伺われる。ヒロインとその恋人との間に復活される親交は、Austen が「心の交流」という過程に与えた重要性を確証している。Anne が Lyme で Wentworth の友人たちと過

したある夕方のこと、もし Wentworth の結婚申込みを断らなかつたら、彼が与えることが出来たと思われるものをふりかえって考えていた。その時彼女は「この人たちはみんな私のお友達になっていたはずの人たちなんだわ。」と気付く。貴族の邸宅といったようなもので講じられる種類の安全性を与えてくれることは出来なくても、彼の友人たちは、Anne が以前に出会ったどんなものより実際の魅力的な代替物を提供してくれているのである。

Anne は以前に Lady Russell の判断に従って Wentworth の申込みを断ったことについて、よく考えたあとで次のように説明する。

.. if I had done otherwise, I should have suffered more in continuing the engagement than I did even in giving it up, because I should have suffered in my conscience.<sup>(42)</sup> (p 246)

当時 Anne はほんの 19 才で、Lady Russell は母親代りだった。小説のはじめから読者は Anne が 1787 年生まれであることがわかっている。(未成年だったので、Anne は自分の決定を自由に出来なかったのだ。) だからもし 'in the year eight' (p 247) つまり 1808 年に彼が再び結婚を申し込んだら、自分は婚約をし直しただろうとははっきり答える。その年が彼女の成年に達する年であるから。Wentworth はもう一度申し込まなかった自負心を後悔するばかりである。しかし自分の行動についての厳格で断固たる考察は、少なくとも Anne の 'the resolution of a collect mind' (p 242) 沈着な心の決断を彼に認めさせることになる。こう考えてみると、2 人がそれぞれ相手にぴったりの精神的特徴を持っていると云える。しかしそういうことよりも、2 人は生活を本気で共にしていく過程そのものを楽しんでいるのである。ここに真の心の交流があるのだ。いみじくも Anne と Wentworth

は 'the personal hour' ( p 240) 「このひと時」を利用して「2人の今後の生活の最も幸福な思い出と結び合わされて一生忘れ得ない時」とするのである。彼等は 'so poignant and so ceaseless in interest' ( p 241) 「興味が津々として尽きない」問題について夢中になって話しこんでいる。それ故読者には 'of yesterday and today there could scarcely be an end.' 「昨日と今日のことは、いくら話しても果てしなかった」というこの意味がはっきりわかる。

小説からの引用は全部 ( ページの数も )

*The Oxford Illustrated Jane Austen*

Volume V *Northanger Abbey and Persuasion*

Edited by R. W Chapman, London, Oxford University Press, 1975からである。

1. 'Biographical Notice,' prefixed to the 1st edition, 1818
2. *Jane Austen's Letters*, collected and Edited by R. W Chapman, Oxford University Press, Oxford, 1979 PP. 486-7.
3. *The Common Reader* (1925) in *Casebook 2*, P. 152
4. *The Oxford Illustrated Jane Austen* P. 30
5. Douglas Bush : *J. Austen*  
New York, Macmillan 1975, P. 181
6. Fay Weldon : *Letters to Alice on first reading Jane Austen*, Rainbird Publishing Group, London, 1984, PP. 61-2.
7. Leroy W. Smith. *Jane Austen and The Drama of Woman* The Macmillan Press London. 1983, P. 156 P. 158 P. 158 P. 158 P. 173
8. John Hardy : *Jane Austen's Heroines*  
Routledge & Kegan Paul, London 1984 P. 109
9. *The Oxford Illustrated Jane Austen*, P. 26
10. *ibid*, P. 28
11. *ibid*, P. 59
12. *ibid*, P. 60
13. *ibid*, P. 61
14. *ibid*, P. 61
15. Juliet McMaster : *Jane Austen on Love* English Literary Studies Published at the University of Victoria ELS Monograph Series No. 13. 1978, P. 72
16. *The Oxford Illustrated Jane Austen* P. 242
17. *ibid*, P. 111.
18. *ibid*, P. 114.
19. *ibid*, P. 116.
20. *ibid*, P. 123.
21. *ibid*, P.P. 124-5.
22. *ibid*, P. 192.
23. *ibid*, P. 146.
24. *ibid*, P. 160.
25. *ibid*, P. 160.
26. *ibid*, PP. 160-1.
27. *ibid*, P. 167.
28. *ibid*, P. 175.
29. *ibid*, P. 181.
30. *ibid*, P.P. 185-6.
31. *ibid*, P. 188.
32. *ibid*, P. 191.
33. *ibid*, P. 221.
34. *ibid*, P. 227.
35. *ibid*, P. 231.
36. *ibid*, P. 232.
37. *ibid*, P. 233.
38. *ibid*, P. 235.
39. *ibid*, PP. 240-1.
40. *ibid*, P. 85.
41. Walton Litz : "A Development of Self" 'Character and Personality in Jane Austen's Fiction', PP. 76-7
42. *The Oxford Illustrated Jane Austen*, P. 246